

イラスト●幡池裕行
ストーリー●花園由宇保

◎新連載!! 熱筆イラストストーリー



カ リュウ ド
狩猟機
MOBIRIA 1092

SECT.1 『風—フェン—』

扱^{サテ}れ気高^{オオキミ}す我が王^{オオキミ}

鋼^{ハガネ}の馬^{ウマ}と御存^{ミコト}ぞか

彼^{カノ}地に勇士^{フシ}『風^{フエ}』在^アりて

差^サし迫^{ユウ}る敵^{ユウ}に悠^{ユウ}悠^{ユウ}と

抜^ヌき差^サし

突^ツき刺^シし

突^ツき進^{シム}む

扱^{サテ}、其^{ソノ}の勇士^{フシ}はと眺^{ノゾミ}むれば

は一面^{イツメン}妖^{ヤウ}なり、笑^エ止^トまり

鋼^{ハガネ}の鎧^{ヨロイ}か

はたまた馬^{ウマ}か

兎^{ウサギ}狭^セいと舞^マい踊^マります

いやいや、これ^{コレ}は

戯^ザ水^{スイ}事^{ゴト}

善^{ゼン}哉^{ザイ}、いよいよやな

へ或^アる吟^{ギン}遊^{ユウ}詩^シ人^{ニン}の吟^{ギン}誦^{ソウ}へ



浩々たる荒野。
一陣の強風が吹き抜けた。
既に彼の剣は敵の鎧を貫いている。
その剣を伝わって、傷口からしたり落ちる半透明な褐色の液体。

それは血液のようでもあり、また、機械に用いる潤滑剤のようにも見えた。
今まさに息絶えんとする動力系の微かな震えが、剣を通して彼の手に伝わる。
声も無い。

敵の操手はもはや絶命しているであろう。

彼は左の手で敵の身体を支え、剣を持つ手に力を込めた。

ギギッ……

食い込んだ剣が敵の鎧と擦れあって、鈍い響きをたてる。

——何度聞いても嫌な音だ……

彼は満身の力を込め、一気にその長い剣を引き抜いた。

褐色の液を迸らせ、其の場に崩れ落ちる敵の身体。

彼も其の液を身体中に受け、恰も返り血を浴びた武者のごとくであった。

彼はゆっくりと腰を落とし、倒れた敵の首を持ちあげる。

五〇〇……いや、二〇〇にでもなればいほうか……

彼は敵の頭部に張りついた仮面のようなものを無表情に見つめた。

それは、まるで彼をあざ笑うかのような冷たい笑みを浮かべているようにも見える。

……

彼は片膝で敵の肩を強く踏みつけ、両腕で敵の首を抱えこんで力任せに振じ上げた。

ギギッ……

軋みとも悲鳴ともつかない、鈍く甲高い音が耳に突きささる。

首の骨格がかしぐ音かも知れない。

……

やがて、彼の手に不快な感触。首と胴とを結ぶ管などが次々に引き千切れていく。

バキッ！

音とともに彼の身体が揺らいだ。

ついに敵の首をもぎ取ったのである。

オォー……

機械的な唸りをあげて、彼は一気に立ち上がった。

右の手には、もぎ取った首が無造作に握られている。

彼の名はニキ・バンシュマル。

フェンと名乗る男の駆る機械。

人は、彼等戦闘用兵器のことを「操兵」と呼んだ。

カシユガル。

それは砂漠に浮かぶ広大なオアシス。

フェンがその町へ入ったのは、太陽が遥か頭上に輝く頃であった。

ニキ・バシユマールの背に負われた剣が、動きにつれて大きく揺れる。

その剣の揺れとともに、リズミカルに跳ね躍る三つの塊。

それはフェンとニキ・バシユマールによって打ち獲られた哀れな操兵の首である。

首は鬺う男達の野心。

仮面は生活の糧。

男たちは首をその土地の領主に捧げ、仮面を売る。

領主は仮面を館の門に塗り込め、自らの手柄とするのが常であった。

日々価値基準が流転するこの世において、仮面は何ものにも勝れる品。

男達が命を懸けて手にいれたその価値は、宝飾品などの比ではなかったのである。

領主の館は、町を抜けた森の奥。

そこへ行き着くには、必然的にナムルの市を通ることになる。

ナムルの市。

多くの人々が行き交い、小さな露店が無数に集中する場。

「……………」

フェンは市の隅にバシユマールを乗り捨て、人ごみの中へ足を踏み入れた。

「肉を……………」

露店の前に立ち、金貨を投げる。

「へい、まいと……………」

やけに腰の低い男が、よく焼けた肉を手渡す。

「旅のお方ですか。この町は初めてで？ いや、あつしなんかずっと……………」

一方的に、次々と言葉を繰り出す男。

しかし、そのとき既にフェンの全神経は他に注がれていた。

女だ。

華奢な身体。

整った顔立ち。

ひきしまった小麦色の肌。

フェンと比べても、まだ若い。

「……………」

茫然と立ち尽くすフェン。

その手から肉片が落ちた。

視界から去って行く女。

「お、おい……………」

フェンはとっさにその姿を追った。

「……………」

珍しくフェンの表情に動揺の色が見える。

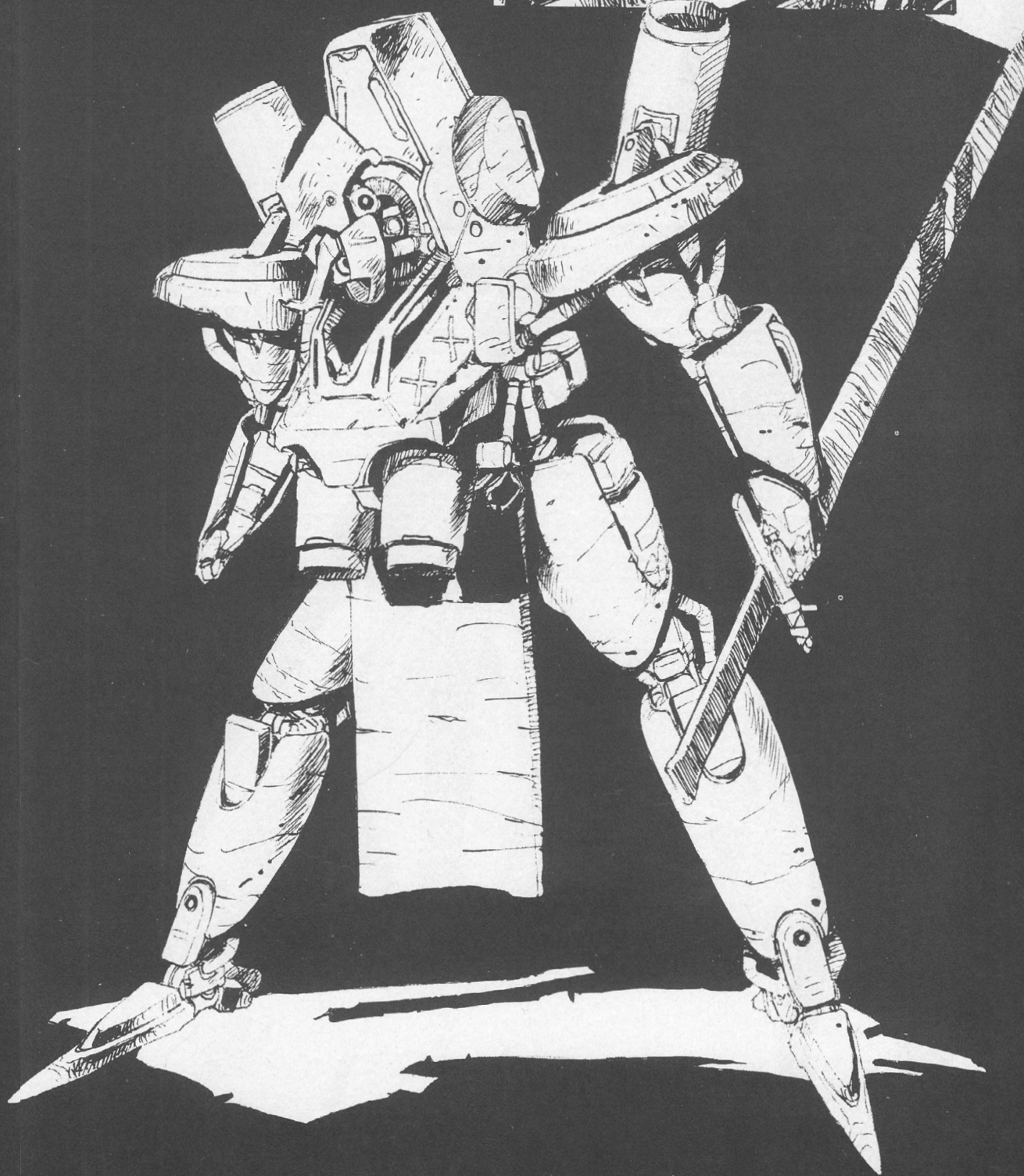
彼は偶然出会ったその女に、幼なき頃別れた母の面影を見たのであった。

再び出会えるだろうか……………」

胸が熱く高鳴る。

それは、彼が長い間忘れていたものだった。





フェンは再びバシユマールを駆る。
動力が始動する際の心地よい震動が、彼の
高鳴る心を和ませる。
彼の心も、懐と同じく空である。
だから行くのだ。
領主のもとへ――
バシユマールはゆっくりと始動した。
やがて鬱蒼たる森。
木立ちを巧みに抜けてバシユマールは進む。

そのときだった。
バシユマールの感應石が背後に敵の来襲を
知らせる。
――！

素早く振り返るバシユマール。
しかし、その前には既に黒い影が立ち塞が
っていた。
それは、彼等が最も嫌う臭いを放つ一機の
操兵。
バシユマールはそれを見据えて静かに剣を
抜いた。